

Choir  
Oedo  
Choralier

合唱団お江戸コラリアーズ

第二十一回演奏会

なにがてんしからの  
おくりものか

2022. 8/7 (日) 東京芸術劇場  
コンサートホール

後援 東京都合唱連盟

本日はお忙しい中、合唱団お江戸コラリアーズ第21回演奏会にお越しいただき誠にありがとうございます。

我々は昨年10月の演奏会のあと、第6波とも折り合いをつけながら4月に Mu Projectとの男声ジョイント、5月に La Pura Fuenteとの混声ジョイントを開催することができました。それぞれの音楽に取り組む姿勢には仲間として多くの刺激を受けました。ありがとうございました。

新型コロナ、ウクライナ情勢、地震や風水害、テロの脅威など先の見えない中、私たちは正解の見えない未来を手探りで進み生きています。それぞれが家庭や仕事・学業など日々の出来事に対し、手探りを繰り返しながら前に進んでいます。例えば恋愛でも、手探りの中で何かを掴んだ瞬間の感動は個々の人生に刻み込まれ価値観を作っていきます。

今日私たちの演奏するそれぞれの作品からは、詩人・作曲家が手探りで生きていたそれぞれの時代の価値観を感じ取ることができます。おそらくバルトクや堀口大學の感じた約100年前、クレーや清水脩の感じた約80年前の情勢にもその瞬間に創作者の心を揺さぶった動機・モチーフがあったはずです。詩や音楽が生まれる背景にはその時代を手探りしている肌感覚が切り取られています。そして私たちはその手触り感を楽しみながら、2022年を手探りで生きる私たちの音楽表現としてお届けします。

さて、おえコラとしては初めてヨーロッパの作曲家に委嘱をしました。見知らぬ日本の男声合唱団から手探りで送られて来たオファーを快く受けていただきました。1991年9月のバルト3国完全独立を経験した Vasksはこの作品を産み落とした瞬間何を感じていたのか。初演を生で聴いていただくことはできませんが、いい演奏をすることで応えたいと思います。

本日も各種ガイドラインを踏まえてコンサートを運営します。ご来場のお客様にも対策にご協力いただくこととなりますが、ホールの中でしか聞けない演奏空間を楽しんでいただけるよう、精いっぱい歌います。

最後に、今回の演奏会に多大なる協力をいただきました諸先生方、共演者、スタッフ、団員の家族の皆様にご心より感謝いたします。

## 希望の歌声

指揮者 山脇 卓也

ラトビアを初めて訪れたのは1998年のことでした。1991年に独立を果たし、その数年後の首都リガは、旧ソビエト時代の陰影を持ちつつも、新たな希望に包まれていました。5年に一度開催される歌と踊りの祭典へ参加するための訪問でしたが、その祭典はそれまでの私の合唱観を大きく変えるものでした。1万人を超える人々による大合唱。それを超える聴衆。それぞれの地域の民族衣装に身を包み、自分たちの言葉で歌える喜びを身体いっぱいに表現していました。歌が特別なものではなく生活のすぐそばにあるもの、自由に自分自身を歌に乗せている姿に感動しました。以来、ラトビアを始めとしてバルト三国の合唱文化に大きな関心を寄せていました。今回、その合唱大国ラトビアの素晴らしい作曲家ペーテリス・ヴァスクス氏への委嘱作品を演奏します。委嘱に当たっては、合唱指揮者の松原千振先生に橋渡しを快く引き受けていただき、今回の作品が誕生いたしました。私のラトビア愛？が一つ結実し、本当に嬉しく思っています。

バルト三国といえば、独立前は旧ソビエトに併合されていました。その期間、特にスターリンによる民族強制移住という政策のため、現在もバルト諸国内に少なくないロシア人がいます。今年、ロシアがウクライナを侵攻していますが、ウクライナにいるロシア人を保護することを名分にしているため、バルト諸国の危機感には次は自分たちだ、というくらいとても強いです。ロシアが多くの国による非難にも関わらず、半年経とうとする今もなお戦闘を続け、多くの人々が犠牲になっていることに私自身暗澹たる思いです。今日も演奏する「ぼくの村は戦場だった(信長貴富作曲)」は一人の戦場ジャーナリストをテーマにしていますが、今回のウクライナにおける戦争でも多くのジャーナリストが危険を顧みずに取材をされています。おかげで、いわゆる大本営発表を鵜のみにすることなく、そこで起っていることをかいま見ることができます。戦争をしない、人を殺さない、そんな当たり前のことをそんなに言い続けなくても、という気持ちもあるわけですが、先進国であるロシアですらいまだに実力行使する世界だという現実を突きつけられ、残念でなりません。

ジャーナリストが目を見たことを伝える、その先には平和な世を待ち望む思いがあります。いつかこのような悲しいことを伝えなくてもいい世界を希求する気持ち。これは、信長作品との親和性があるように思います。信長作品は、どんなにつらく悲しい曲であっても、どこかに希望があり、救いがある。それは作曲家信長貴富ならではの切り取りなのかもしれないですが、大きく共感できるどころです。

今回の演奏会では、これらに加えて男声合唱の最も古いと言われている組曲作品である「月光とピエロ」、そして21世紀に生まれた名曲の一つ「天使のいる構図」という新旧二つの名曲という構成になっています。どうか、お楽しみください。

# 合唱団お江戸コラリアーズ 第21回演奏会

## Program

### 1st ステージ

外国語アラカルト

#### Négy régi magyar népdal

(4つの古いハンガリー民謡)

作曲：Bartók Béla

指揮：山脇 卓也

#### Trīs dziesmas

(3つの歌)【委嘱初演】

作詩：Knuts Skujenieks 作曲：Pēteris Vasks

指揮：山脇 卓也

#### La Cucaracha メキシコ民謡

(ゴキブリ)

編曲：Robert Sund

指揮：村田 雅之

### 2nd ステージ

男声合唱とピアノのための

#### 「ぼくの村は戦場だった」

—あるジャーナリストの記録—

第一章 カメラとペン

第二章 111000000

第三章 ぼくは兵士だった

第四章 ねがい

第五章 もし、ぼくが

第六章 目を凝らし、耳を澄ませば

テキスト構成・作曲：信長 貴富

指揮：山脇 卓也

ピアノ：松元 博志

### 3rd ステージ

男声合唱組曲「月光とピエロ」

I. 月夜

II. 秋のピエロ

III. ピエロ

IV. ピエロの嘆き

V. 月光とピエロとピエレットの唐草模様

作詩：堀口 大 作曲：清水 脩

指揮：山脇 卓也

### 4th ステージ

男声合唱とピアノのための「天使のいる構図」

I. Prelude

II. Capriccio

III. Tempestoso

IV. Intermezzo

V. Finale

作詩：谷川 俊太郎 作曲：松本 望

指揮：村田 雅之

ピアノ：松元 博志

## 演奏会アンケート

本日はご来場頂きまして誠にありがとうございます。  
今後の参考のため、ぜひアンケートにご協力ください！

(回答受付：8月8日(月) 23:59 まで)



こちらの QR コードを読み取って  
ご回答ください

※ 演奏中の入力はお遠慮ください。

### Négy régi magyar népdal

(4つの古いハンガリー民謡)

作曲：Bartók Béla

指揮：山脇 卓也

バルトーク・ベーラ(1881-1945)はハンガリーの作曲家。ハンガリーやその周辺諸国の民謡を採集して回り、自身の作品に生かすことで独自の作風を作り上げた、20世紀前半を代表する作曲家である。管弦楽曲・協奏曲・室内楽曲・ピアノ曲などに優れた作品を残しており、主要作品に「弦楽器と打楽器とチェレスタのための音楽」、「管弦楽のための協奏曲」、6つの弦楽四重奏曲、オペラ「青ひげ公の城」がある。

「4つの古いハンガリー民謡」は1910年に作曲、1926年に改訂されており、バルトークが初めて合唱のために編曲した民謡である。バルトークの合唱作品は男声合唱が比較的多いが、これは20世紀初頭、ハンガリーに多くの男声合唱団があり、優れた実力を持っていたためである。元となった民謡はいずれも作曲家自身が採集しており、3つの異なる地域から来たものである。音楽やテキストは4曲の民謡でそれぞれ性格が異なっている。第1曲はハンガリー民謡に特徴的なパルランド・ルバート様式であり、拍を正確に刻むのではなく、言葉のリズムによって自由に伸び縮みする。第2曲以降は舞踏の *Tempo giusto* の音楽であり、拍子は厳格に数えられる。第2曲は曲集のなかで最も短く、第3曲はユーモアあふれるテキストが小気味良く快活に歌われる。第4曲以外では旋律が常にトップテナーにあるが、第4曲では主題の提示後、中間部にカノンを含んでいる。カノンを経ると、声が熱を帯びていき、興奮した様子で曲を閉じる。

(坂巻 賢一)

### La Cucaracha

(ゴキブリ)

編曲：Robert Sund

指揮：村田 雅之

編曲者の Robert Sund (1942-) はスウェーデンの指揮者・作曲家。1985年から2008年まで、世界的に有名な男声合唱団“Orphei Drängar”の指揮者を務めた。作曲家としては、同合唱団のコンサートのために240もの作品・編曲を残しており、そのどれもが男声合唱の可能性と面白味を伝えてくれるものになっている。

La Cucarachaはスペイン語で「ゴキブリ」の意味であり、19世紀頃から歌われているメキシコ民謡。日本では「車にゆられて」という題名で、NHKの「みんなのうた」で放送されたこともある。男声合唱版は1992年の“Orphei Drängar”のメキシコ演奏旅行のために編曲された。同合唱団の力量を示すような、いわゆる超絶技巧の編曲であるが、聴衆を楽しませるようなサービス精神にも溢れている。陶酔的な導入部に続き、ノリの良いラテンのリズムが展開し、民謡のメロディーが姿を現す。メロディーが歌われる声部や調性を目まぐるしく変え、ジェットコースターのように音楽は進み、熱狂的なコーダで締めくくられる。

(坂巻 賢一)



【委嘱初演】

# Trīs dziesmas

(3つの歌)

作詩：Knuts Skujenieks

作曲：Pēteris Vasks

指揮：山脇 卓也



作曲者：

## Pēteris Vasks

ペーテリス・ヴァスクス(1946-)

ヴァスクスは、ラトビアのアイズプテの牧師の家庭に生まれた。ヤーゼプス・ヴィートルス・ラトビア音楽院でヴァイオリンを、リトアニア音楽演劇アカデミーでコントラバスを学び、ラトビアのいくつかのオーケストラで演奏した後、隣国リトアニアのヴィリニュスの国立音楽院に入学して作曲を学んだ。ソ連のバプティストに対する抑圧政策のためにラトビアで作曲を学ぶことが出来なかったためである。1990年代にギドン・クレーメルが彼の作品を取り上げ、ラトビア国外でも知られるようになり、現在ではヨーロッパの現代作曲家の中で最も影響力があり、賞賛されている作曲家の一人である。

ヴァスクスの初期のスタイルは、ルトスワフスキ、ペンデレツキ、クラムの偶然性の音楽に大きな影響を受けた。その後、ラトビアの民族音楽の要素を取り入れており、穏やかで牧歌的なコールアンブレ協奏曲(1989年)などがある。彼の作品は概して、極めて明瞭かつ対話的で、堅固で筋肉質な和声感覚を備えている。叙情的なパッセージに続いて、興奮した不協和音が演奏されたり、行進曲のような雰囲気を持つ陰鬱な部分が挟まれたりする。ミニマリズムの手法も多用するが、特定の手法に固執することはない。

ヴァスクスは環境問題を強く意識しており、弦楽四重奏曲第2番(1984年)など、多くの作品に手つかずと破壊の両方の自然を感じることができる。その他の重要な作品として、「カンタービレ」(1979年)、「ムジカ・ドロローサ」(1984年)、コントラバス独奏のための「バス・トリップ」(2003年)などがある。弦楽四重奏曲は6曲あり、第4番(1999年)と第5番(2004年)はクロノス・カルテットのために書かれたものである。

ヴァスクスは、1996年にアルフレッド・トープファー財団のウィーン・ヘルダー賞、1997年に文学・芸術・科学部門のバルト総会賞、ラトビア大音楽賞を受賞している(後者はヴァイオリン協奏曲『Tālā Gaisma(遠い光)』(1996-7)に対して授与されたものである)。2004年にはカンヌクラシック賞を受賞した。主な作品に「ヴィアトーレ」、交響曲第2番、「亡き友のための音楽」などがある。1994年からラトビア科学アカデミーの名誉会員、2001年にはスウェーデン王立音楽アカデミーの会員となった。1996年にはストックホルム・ニューミュージック・フェスティバルのメインコンポーザー、2006年にはウェールズのプレステージ音楽・芸術祭とヴェイル・オブ・グラモーガン音楽祭でコンポーザー・イン・レジデンスを務めた。

2005年、エストニアの栄誉である白星勲章3等章を受章した。



(3つの歌)

## 曲目解説：サンドラ・ニュツヴェツカ（音楽学者）

ペーテリス・ヴァスクスは、その合唱作品の多くをラトビアのプロ合唱団のために書き、献上している。しかしながら、幾つかの作品はラトビア国外から委嘱を受けている。「チェスワフ・ミウォシュの3つの詩」（1995）はロンドンのヒリアードアンサンブルの委嘱によるもの、「沈黙の果実」（2013、詩はマザー・テレサの祈りの言葉）はシュレスヴィヒ・ホルスタイン祝祭合唱団によるものである。この作品は、ドイツのシュヴェービッシュ・グミュンド市で開催されている2022年度ヨーロッパ教会音楽祭で受賞した際にも演奏された。この賞は作曲家の精神性の高い作品に贈られる。また、「無限の温もり」（2022、詩はクヌーツ・スクイェニエクス）はRIAS室内合唱団の委嘱によるものであり、2021年エリック・エリクソン賞受賞者であるラトビア人指揮者クリスタ・アウデレにより、今年後半にベルリンで初演される予定である。そして今回、日本からは初めての新作委嘱を合唱団お江戸コラリアーズから受けた。合唱団からの要望はラテン語もしくはラトビア語の詩を用いることのみであり、それ以外は作曲者に創作の自由が残されていたため、ヴァスクスは自身の母国語と、自身に非常に親密で、何度もその詩に目を向けている詩人を選択した。

クヌーツ・スクイェニエクス（1936-2022）は、ラトビアで詩に親しんでいる人ならだれでも知っている存在である。彼は学生時代から常に詩を書き続けている。ヴァスクスと同様に、彼の青春と創造の花は、ソヴィエト連邦の占領下の最も暗い時代（1940-1990）に花開いた。1961年、モスクワでの留学を終えてリガに戻った詩人は、反ソ連活動や「報道しない」という理由で逮捕され、7年間の懲役刑を言い渡された。実際には、反抗的な態度をとり、祖国を愛したために処罰されたのである。政治犯収容所であるモルドヴィア流刑地で刑に服した。1989年、ラトビアが独立を果たす直前、社会復帰を果たし、ソ連の独裁体制下では純粋な詩的言語が通じなかった収容所で書かれた詩と、歌詞を中心とした新しい詩、そして24カ国語（！）に翻訳された詩のいずれも出版できるようになったのである。

「言葉には多くの意味があり、独自の秩序がある——時に私には理解できない、神秘的である」とスクイェニエクスは2016年のオルガ・ペーテルソネとの対談で語っている。「しかし、重要なことは、小さな8行の詩の中で、大宇宙と小宇宙を一つの有機体に結合することが可能だということである（中略）詩は言語の中で最も凝縮された形式だ。非常に必要なものである。なぜなら、それは言語を豊かにするだけではないからだ。あらゆる文学ジャンルの中で、詩が最も多くの情報を含んでいることが示されている。しかし、言葉の力は、詩的な情報の中にある。言葉が少なければ少ないほど、その力は強くなる。（中略）300年前、ドイツの啓蒙家たちはすでに、ラトビア人は詩人の国であると言っている。ラトビアの民謡は、必要な歌詞の糸をすでに調整していたからと考えている。（中略）私には、歌詞に生命を吹き込むという仕事があった。私は穏やかな人間だ。私の愛には致命的な情熱はなく、暖かさ、静寂、調和があり、私の歌詞は穏やかである。（中略）神がいるかいないか、それは私には重要でないように思われる。私は、自分が世界の輪の中に含まれていて、自分が依存するルールがあることを感じている。私は地上のへそではなく、一人ではないのだということ。もしこの感覚がなかったら、私は詩人ではないであろう。（中略）すべての祈りは、実は取引なのだ。だから私は、富も、健康も、長寿も、何も求めないし、誰のためにも求めない。

私は光も闇も恐れない。詩人はその両方(人生のすべての悲劇)に直面しなければならない。しかし、私にとって重要なことは、詩は世界の混沌から何かを得なければならないということだ。いつも成功するわけではないが、試行しなければならない。」

クヌーツ・スクイエニエクスの、困難が多くしかし豊かで力強い人生は幕を下ろした。先月7月25日、詩人は85歳の生涯を終えた。

クヌーツ・スクイエニエクスの詩による3つの歌は、男声4部合唱のための8分ほどの連作。1・3楽章は似通った雰囲気であり、静かで聖歌風(多少のクレッシェンドあり)、作曲者は歌う男たちのまどろむような気質を潜ませたと語る。1・3楽章の対比となるのは2楽章である。一種の黒いスケルツォで、例えば早口やささやきなど、異なった色遣いがなされている。

ヴァスクスはこう語っている。

「日本とは1万キロ離れているが、合唱団が聴衆に語りかけ、  
私たちの精神性が似通っていることを確認して欲しいという希望と願いから、この曲集を書いた」



第一章 カメラとペン / 第二章 111000000 / 第三章 ぼくは兵士だった  
第四章 ねがい / 第五章 もし、ぼくが / 第六章 目を凝らし、耳を澄ませば

この作品はテノールの清水雅彦氏の委嘱により独唱版として作曲されたのが最初で、そのあと都留文科大学合唱団(指揮=清水雅彦)により混声合唱版が作られました。昨年は宇都宮中央女子高校(指揮=吉岡訓子)によって女声合唱版が初演され、今日の男声合唱版初演ですべての編成が揃った形となります。

サブタイトルに「あるジャーナリスト」とありますが、これは2012年8月に中東シリアでの銃撃によって亡くなった山本美香さんのことを指しています。独唱版が初演されたのは2014年1月で、山本さんが亡くなってからまだ1年半という時期でした。

本作の歌詞は、山本さんの三つの著作『ぼくの村は戦場だった。』(マガジンハウス)、『戦争を取材する』(講談社)、『中継されなかったバグダッド』(小学館)から抜粋した上で、舞台用の言葉として私が編集したものを中心に構成しています。

そのほかに、子ども兵の描写(第三章)のために『子ども兵の戦争』(P.W.シンガー著、小林由香利訳、NHK出版)を、また、戦争に巻き込まれた子どもたちの肉声(第四・五章)として『目をとじれば平和が見える 旧ユーゴスラビアの子どもたちが描く戦争』(ユニセフ編、ぼるぶ出版)と、『チャンスがあれば… ストリートチルドレンの夢』(「チャンスの会」編・訳、岩崎書店)を参照しています。これらの文献は山本美香さんとは直接の関係はないのですが、山本さんが戦争の中で暮らす子どもたちの姿を多く取材されていたこと、また、戦争から子どもを守るために教育の重要性を訴えていたことを重視して、私なりに歌詞を構成していったという経緯から来ています。

独唱版出版譜の解説から、特にお伝えしておきたいことを以下に引用しておきます。

—歌も一つのメディアであると捉えたとき、作曲という作業にも或る種のリスクが伴っていることを、作り手は自覚しなければならない。何かを伝えるということは、背後に膨大な「伝えないこと、伝えられないこと」があるからだ。ジャーナリズム論的にいえばそれは編集のリスクということになるだろう。メディアが「マス」であればあるほど、編集権は絶大な力を持ち得る。それは権力を監視する力となって市民の声を代弁する働きをすることもあれば、権力と一体となって世論を誤った方向に誘導することもある。歴史を振り返るまでもなく、現在の日本のマス・メディアが何を伝え、何を伝えていないか注意深く観察していれば、自ずと編集のリスクについて自覚することになるだろう。

清水雅彦氏からジャーナリスト・山本美香さんの著作をもとにした声楽作品を、とのご提案をいただいたとき、最初に課題と感じたのが編集のリスクについてだった。山本美香さんの残した仕事のどこを切り取るか、切り取らないか、結局は私の主義主張のフィルターを通過させなければならない。山本さんご自身も著作の中でマス・メディアへの自己批判も含めて編集リスクについて言及されているから、私も彼女のこころざしにならって、編集の罪に自覚的であろうと誓いつつ作業を進めた。—

男声合唱版編曲の機会を与えていただいた合唱団お江戸コラリアーズの皆さん、指揮の山脇卓也さん、ピアノの須永真美さん、各位に感謝申し上げます。

(信長 貴富)

(男声版委嘱初演時の作曲家解説より引用)



**作曲：清水 脩（1911～1986）**

大阪府生まれ。大阪外国語学校卒業後、東京音楽学校（現、東京藝術大学）選科に入学し作曲を学び、オペラや合唱作品を数多く残す。作曲活動の傍ら、設立して間もない頃の音楽之友社に入社、後にカワイ楽譜（現、カワイ出版）の社長として、合唱曲の出版を数多く行った。また、全日本合唱連盟では第四代の理事長として六年務めるなど、普及活動にも熱心だった。多田武彦が教えを受けていた事でも有名である。


**作詩：堀口 大學（1892～1981）**

東京都生まれ。生後間もなく、外交官である父の都合で新潟へ移る。後に慶應義塾大学に入学。詩作を始めるが、父の仕事の都合でメキシコに渡るため中退。父について海外を渡る中で文学を学び、帰国後、病弱の為外交官試験に採用されなかったことを契機に、翻訳、詩作の活動を中心としてゆき、『月光とピエロ』（1919 靱山書店）を自費出版した。

  
**詩集『月光とピエロ』について**

詩集『月光とピエロ』の冒頭には「父におくる」とある。大學の父は外交官で海外を駆け回る身であり、早くに妻を亡くした寡夫でもあった。大學は父と同じ職を目指したが、叶わなかった。肺病に苦しんだ大學は、自分も母と同様に早死にするのではという恐怖があり、詩の行間には死の影が滲んでいるという文を残している。

詩集の主な題材は、マドリード滞在時に会った画家マリー・ローランサンから聞いた、詩人ギョーム・アポリネールとの悲恋とされている。ヴェルレーヌ等ヨーロッパの詩人に影響を受けたその詩群には、日本人が共感する哀愁の中に欧州の薫りを留めている。

  
**組曲について**

1949年、東京男声合唱団が作曲者本人の指揮により初演。第一回全日本合唱コンクール（1948年）の公募課題曲として「秋のピエロ」を作曲、その後、四曲を加えて五曲の連作歌曲とした。曲は簡素にして精緻であり、詩に漂う西洋の薫りと日本的な音階が融合し、どこかエキゾチックな哀愁をおびた組曲となっている。

世界初の合唱組曲として名高く、日本で男声合唱を歌う者にとっていつか必ず歌うであろう組曲である。作曲されて実に70年以上経つが、今なお広く愛唱されている名曲中の名曲であり、名演奏も数知れず存在する。

### I. 月夜 (2)

コロンビーヌはピエロの原型とされるイタリアの即興演劇の登場人物で女性の召使役。転じて女道化師を指す。月光の下ピエロが佇み、彼女を待っているが、彼女はいつまでたっても現れず、ピエロは涙を流す。息の長いレガートを要求される曲。テンポ指定、ブレスのタイミングは合唱団の個性が出る所である。

### II. 秋のピエロ (4)

第一回全日本合唱コンクールの課題曲で、組曲中もっとも愛唱されている曲。陽気におどけているようでも、短音階が悲哀を感じさせる。欧州でも日本でも、秋は悲哀や寂しさを強く想起させる季節である。「身過ぎ世過ぎの是非もなく」と、生きてゆくためには意に染まぬことがあっても、働いて稼がなければならない身の上を嘆く。そんなピエロの心情に「我がピエロ」と共感している。長い抑揚のレガートで歌われる中間部を律動的な前半部と後半部が挟む構成となっている。

### III. ピエロ (3)

ピエロと月(=狂気)を結びつける事例は17世紀ヨーロッパから存在した。詩人はその図式を自らの詩に転用したが、古来より日本の月には狂気との関連がなく、日本人である詩人には月とピエロの構図がどこか哀愁を帯びたものを感じられたのだろう。それは作曲家も同様であった。曲は激しく、速い調子で歌われる冒頭部と再現部、一人で月下舞踏するピエロの舞曲で構成されている。

### IV. ピエロの嘆き (EX-VOTO I)

この曲のみ、別の詩集から採詩している。題名である EX-VOTOはラテン語で捧げ物の意。この詩にはローランサンとアポリネールのパリでの悲恋が暗喩されている。二人は父を知らない私生児であり、5年続いたその恋愛は1911年のモナリザ盗難事件でアポリネールが収監されたことを機に終わってしまう。出牢してもローランサンの姿はなく、幻影が月の光に浮かぶだけだった。恋が終わっても日々は続く。涙を笑顔で隠し、生活していかなくてはならない。二人が再会するのは、パリ郊外のペール・ラシェーズ墓地の土の下であった。

遠い月に彼女の面影を見つつ、泣き笑いながら踊るピエロの姿が描写される。それはローランサンを失ったアポリネールの姿だった。

### V. ピエロとピエレットの唐草模様 (5)

ピエロ(Pierrot)はフランス語で道化師を指す言葉で、ピエレット(Pierette)はフランスの女性名。転じて女性道化師を指す言葉として使われる。また、唐草模様は洋の東西を問わず存在する、蔓草を象った模様のこと。軽快に幾度も繰り返される「ピエロピエレット」の語句は幾何学的な文様を描き、高揚しフィナーレへと至る。それは男女のピエロが幸せに月下舞踏する姿を想起させる。しかし、それは幻想に過ぎなかったのだ。

# 4<sup>th</sup> ステージ

## 男声合唱とピアノのための 「天使のいる構図」

作詩：谷川 俊太郎  
作曲：松本 望  
指揮：村田 雅之  
ピアノ：松元 博志

I. Prelude II. Capriccio III. Tempestoso IV. Intermezzo V. Finale

「男声合唱とピアノのための『天使のいる構図』」は、2009年に作曲、おえコラの兄弟分(?)であるなにわコラリアーズの皆さんによって初演されました。当時は留学先の卒業試験を控えた中での作曲で、自分のアイデアを丁寧に吟味して書くような余裕もなく、その割に構想だけは結構壮大でまとまりがつかず…、というような空中分解寸前状態だったため、脱稿時は「初演の後二度と再演してもらえなくても仕方ない」くらいのやけっぱちな気分でした。ですが、作曲者本人の不安げな予想に反して、初演の快演に助けられた形で、今に至るまで全国の多数の男声合唱団にこの曲を再演し続けていただけているのは大変嬉しく、またこの曲のイメージが強いのか、私への新曲委嘱の依頼も男声合唱曲の割合がかなり多い(笑) というのも、またありがたいことです。

日本の男声合唱界を牽引している団体の1つであるおえコラさんですが、私自身はあまり関わるチャンスがなく、一昨年の定期演奏会にて拙作の「Song of the Open Road」を取り上げていただく際に練習見学させていただいたのが、団員の皆さんにちゃんとご挨拶をした最初だと記憶しています。その練習後の軽い打ち上げで話が色々盛り上がって、「今度『天使〜』と一緒に演奏しましょう」という話になって、本日こうしておえコラの皆さんに『天使〜』を歌っていただけることになりましたが、“共演”は叶わず、その点は少し残念です。一緒に演奏することはできませんが、おえコラの皆さんならば、必ずエネルギーに満ちた、心に響く演奏をしてくださるものと期待しています。

(松本 望)



作曲者：

**松本 望** (まつもとのぞみ)

北海道出身。東京藝術大学大学院修士課程作曲専攻修了。パリ国立高等音楽院ピアノ伴奏科首席卒業(審査員満場一致)。2003年東京文化会館主催合唱作品作曲コンクール最優秀賞。受賞作をはじめ自作曲集、編曲集等の出版多数。2007年第4回リヨン国際室内楽コンクール第1位。2009年第55回マリア・カナルス国際音楽コンクール・ピアノトリオ部門第1位。

これまで国内外のアーティストとの共演を重ね、CDレコーディング等にも多数参加のほか、アンサンブルピアノのための入門書『合唱エクササイズ・ピアニスト編(カワイ出版)』を2017年よりシリーズで刊行中。現在、国立音楽大学ピアノ科、洗足学園音楽大学作曲科、各非常勤講師。東京藝術大学弦楽科伴奏助手。

今年は2015年以来7年ぶりにNHK全国学校(合唱)音楽コンクール課題曲の作曲を担当。

## 指揮者・共演者



### 山脇 卓也（指揮）

早稲田大学大学院理工学研究科電子情報通信学専攻修了。在学中グリークラブにて学生指揮者を務める。故北村協一氏に指揮の手ほどきを受け、合唱音楽全般において栗山文昭氏の影響を受ける。

現在、合唱団お江戸コラリアーズ、東京純心大学合唱団Pure Heart、立正大学グリークラブ、女声合唱団ぴゅあはーと、府中アカデミー合唱団、早稲田大学女声合唱団、BALSSで指揮者を務める。コンクール等へも活発に参加しており、全日本合唱コンクールにおいてはお江戸コラリアーズが9回金賞を受賞、うち5回は第一位の文部科学大臣賞を受賞している。

信長貴富氏をはじめとする邦人作曲家とのコラボレーションは着実な成果を挙げており、多くの作品の初演に携わっている。また、1998年と2013年にはユネスコの無形文化遺産に認定されているラトビア歌と踊りの祭典に参加。バルト・北欧の作品に強い関心を持って発信を行っている。

JCDA日本合唱指揮者協会会員、21世紀の合唱を考える会 合唱人集団「音楽樹」会員。

### 村田 雅之（指揮・ピアノ）

石川県白山市出身。中学時代より吹奏楽部で指揮者、合唱部にてピアニストを務める。石川県立金沢泉丘高等学校理数科を経て、横浜国立大学工学部出身。大学在学中はグリークラブに籍置き、1年次より学生ピアニスト、3年次には学生指揮者を務める。

在学中より多くの一般合唱団や講習会に参加、合唱全般の研鑽を積み、栗山文昭、松下耕、伊東恵司の各氏から影響を強く受ける。

合唱団お江戸コラリアーズ、なにわコラリアーズにて、歌い手の他、指揮、ピアノ、打楽器を担当。音楽関連会社に勤務のかたわら、指揮・指導活動を行っている。合唱団お江戸コラリアーズ、横浜国立大学グリークラブ、同団OBメンバーズ、小田原男声合唱団、男声合唱団東鶴の各指揮者、立正大学グリークラブアンサンブルトレーナー。



### 松元 博志（ピアノ）

国立音楽大学卒業。同大学院音楽研究科修士課程器楽専攻修了。

これまでにピアノを大内裕子、大黒康子、山内直美、安井耕一の各氏に、室内楽を徳永二男、長尾洋史の各氏に、伴奏法を浅井道子氏に師事。

大学在学中、『聴き伝わるもの、聴き伝えるもの』シリーズに出演、現代器楽作品の初演等に参加。2010年・2014年、ジョイント・リサイタルを開催。ソロ演奏の他、連弾・2台ピアノのアンサンブルにも取り組むなど積極的にアンサンブルの研鑽を積み、特に合唱との共演は数多い。

現在、室内合唱団 日唱（日本合唱協会）をはじめ多くの合唱団にてピアニストを務め、声楽・器楽・合唱の共演者として多くの演奏会に出演。新作初演やレコーディングにも携わるなど、活発な演奏活動を行っている。



# 合唱団お江戸コラリアーズ

TOP TENOR	SECOND TENOR	BARITONE	BASS
浅井 淳子 須永 紀彦	相沢 祐太郎 坂巻 賢一	池田 裕 田村 侑介	杉江 祐哉 原 脩
石黒 貴志 塚原 惇平	熱田 真久 佐々木 智穂	稲田 智昭 中村 和朗	鈴木 廉 松田 浩
宇田 文顕 福田 貴之	伊藤 徳和 関 大雅	岡部 優 西 隆生	関 一輝 峯松 重喜
加藤 翼 山根 武夫	小沼 達也 武部 幸生	春日 亮 山田 光輝	土屋 稜至 村田 雅之
小林 亮 山脇 卓也	郡司 佳依 長野 啓太	金子 剛史 渡部 秀文	中川 航平
斎藤 充昭 吉岡 駿治	小谷 直人 中村 理應	吉川 和美	
迫田 正翔 米屋 陽也	小林 誠和 濱田 和哉	田村 侑介	
鈴木 広之	齋藤 和樹		

## Special thanks to

ヴォイストレーナー  
大島 博 先生

舞台監督  
草薙 みちる 様

フロント (チーフ)  
坂田 峻祐 様

フロント (スタッフ)  
石井 光 様

小宅 巧馬 様

塩見 涼太 様

諏訪 かほる 様

滝田 友香 様

矢ヶ崎 綾子 様

カメラ  
山口 敦 様

録音  
KOSSACK 様

映像撮影  
中部クリエイティブ 様

デザイン (チラシ・パンフレット)  
倉林 賢 様 (KURAGE BRAIN)

Vasks 氏マネージャー  
Guntars Felsbergs 様

Composer Manager  
(SCHOTT MUSIC GmbH & Co. KG)  
Yvonne Stern-Campo 様

指揮者  
松原 千振 様

## プロジェクトメンバー

チーフマネージャー  
宇田 文顕

マネージャー  
伊藤 徳和

演奏会プロジェクトマネージャー  
加藤 翼

ステージ企画・運営  
村田 雅之

フロント統括  
石黒 貴志、吉岡 駿治

一般会計  
渡部 秀文

演奏会会計  
中川 航平

チケット管理  
石黒 貴志

招待状管理  
関 大雅

パンフレット企画・制作  
山根 武夫、坂巻 賢一

## 今後の予定

2022年8月28日(日)

Ringmasters Japan Tour 2022 東京公演 in 晴海  
(賛助出演)

会場：第一生命ホール

2023年2月23日(木・祝)

アイノラ交響楽団 第20回定期演奏会～作曲家シベリウスの誕生～  
(出演)

会場：ミューザ川崎シンフォニーホール 音楽ホール

2023年8月12日(土)

合唱団お江戸コラリアーズ 第22回演奏会

会場：杉並公会堂 大ホール





